

[D年] 公現後第1主日(2024年1月7日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書 42章1～9節

- 1 見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。
わたしが選び、喜び迎える者を。
彼の上にわたしの霊は置かれ
彼は国々の裁きを導き出す。
- 2 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。
- 3 傷ついた葦を折ることなく
暗くなってゆく灯心を消すことなく
裁きを導き出して、確かなものとする。
- 4 暗くなることも、傷つき果てることもない
この地に裁きを置くときまでは。
鳥々は彼の教えを待ち望む。
- 5 主である神はこう言われる。
神は天を創造して、これを広げ
地とそこに生ずるものを繰り広げ
その上に住む人々に息を与え
そこを歩く者に霊を与えられる。
- 6 主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼び
あなたの手を取った。
民の契約、諸国の光として
あなたを形づくり、あなたを立てた。
- 7 見ることのできない目を開き
捕らわれ人をその枷から
闇に住む人をその牢獄から救い出すために。
- 8 わたしは主、これがわたしの名。
わたしは栄光をほかの神に渡さず
わたしの栄誉を偶像に与えることはしない。
- 9 見よ、初めのことは成就した。
新しいことをわたしは告げよう。
それが芽生えてくる前に
わたしはあなたたちにそれを聞かせよう。

【使徒書日課】

エフェソの信徒への手紙 2章1～10節

1 さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。2 この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいました。3 わたしたちも皆、こういう者たちの中において、以前は肉の欲望の赴

くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。4 しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛して下さり、その愛によって、5 罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、—あなたがたの救われたのは恵みによるのです—6 キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。7 こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。8 事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。9 行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。10 なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備して下さった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 1章29～34節

29 その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。30 『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。31 わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。32 そしてヨハネは証した。「わたしは、『“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。33 わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人とどまるのを見た。その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。34 わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 42章1～9節

- ¹ 見よ、私が支える僕
私の心が喜びとする、私の選んだ者を。
私は彼に私の霊を授け
彼は諸国民に公正をもたらす。
- ² 彼は叫ばず、声を上げず、
巷にその声を響かせない。
- ³ 傷ついた葦を折らず
くすぶる灯心の火を消さず
忠実に公正をもたらす。
- ⁴ 彼は衰えず、押し潰されず
ついには、地に公正を確立する。
鳥々は彼の教えを待ち望む。
- ⁵ 天を創造して、これを延べ
地とそこから生ずるものを広げ
その上に住む民に息を与え
その中を歩く者に霊を授けられる方
主である神はこう言われる。
- ⁶ 主である私は義をもってあなたを呼び
あなたの手を取り、あなたを守り
あなたを民の契約とし、諸国民の光とした。
- ⁷ 目の見えない人の目を開き
捕らわれ人を牢獄から
闇に住む者を獄屋から連れ出すためである。
- ⁸ 私は主、これが私の名。
私の栄光を他の者に
私の誉れを偶像に与えることはない。
- ⁹ 見よ、先にあったことは実現した。
そこで、私は新しいことを告げよう。
それが起こる前に
私はあなたがたに聞かせよう。

エフェソの信徒への手紙2章1～10節

¹さて、あなたがたは、過ちと罪とのために死んだ者であって、²かつては罪の中で、この世の神ならぬ神に従って歩んでいました。空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な子らに今も働

く霊に従って歩んでいたのです。³ 私たちも皆、以前はこういう者たちの中にいて、肉の欲のままに生き、肉とその思いとの欲することを行い、ほかの人々と同じように、生まれながらに神の怒りを受けるべき子でした。⁴ しかし、神は憐れみ深く、私たちを愛された大いなる愛によって、⁵ 過ちのうちに死んでいた私たちを、キリストと共に生かし、——あなたがたの救われたのは恵みによるのです——⁶ キリスト・イエスにおいて、共に復活させ、共に天上で座に着かせてくださいました。⁷ それは、キリスト・イエスにおいて私たちが賜った慈しみにより、神の限りなく豊かな恵みを、来るべき世々に現すためでした。⁸ あなたがたは恵みにより、信仰を通して救われたのです。それは、あなたがたの力によるのではなく、神の賜物です。⁹ 行いによるものではありません。それは、誰も誇ることがないためなのです。¹⁰ 私たちは神の作品であって、神が前もって準備してくださった善い行いのために、キリスト・イエスにあって造られたからです。それは、私たちがその善い行いして歩むためです。

ヨハネによる福音書1章29～34節

²⁹ その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。³⁰ 『私の後から一人の人が来られる。その方は私にまさっている。私よりも先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことである。³¹ 私はこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、私は、水で洗礼を授けに来た。」³² またヨハネは証して言った。「私は、霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。³³ 私はこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるようにと、私をお遣わしになった方が私に言われた。『霊が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である。』³⁴ 私はそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・1月7日「公現後第1主日」の日課主題は「イエスの洗礼」。主イエスの洗礼の出来事は、伝統的に、東方教会では1月6日「公現日(神現祭)」に記念し、西方教会では「公現日」後の主日に記念してきた。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から「主の僕の召命」を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、救いについての福音理解を確かめる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、洗礼者ヨハネが主イエスの洗礼について告げる箇所。

旧約日課(イザヤ 42 章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。総論は、前回資料「聖書と祈りの会 231227」なども参照。本預言書は、前8世紀の歴史的な宮廷預言者イザヤに帰される前半(1~39章)と、イザヤの伝統継承を自認する前6世紀の祭司・預言者集団に帰される後半(40章以下)に分けて解され、後半は「第二イザヤ」と呼ばれてきた。日課箇所は、「第二イザヤ」に含まれる。

・「第二イザヤ」は、前6世紀に南王国ユダが滅亡後、バビロン捕囚を経てペルシア支配時代に入り、ユダ帰還、エルサレム神殿再建など「ユダ共同体再興事業」が進められていく時代を背景に告げられた預言の集成と考えられている。この事業は、元来がペルシア帝国の統治原理に基づく世俗的営為として興されたものであったが、これに大義を付するために、参与した祭司・預言者集団が後に「正典」として編纂されるようになる諸文書を著作・公表するようになった。当時、かつての南王国社会を構成していた人々は、バビロン移住組、ユダ残留組、エジプト亡命組に大きく分断しており、また旧北王国領域でユダの同胞社会として残存していたサマリア組も含めて、相互に主導権を争い合う関係にあった。ペルシア帝国支配下でペルシア王任命のユダ州太守とされたのは、バビロン移住組の旧王族の一人ゼルバベルで、協力者は同じくバビロン移住組の祭司集団を代表する大祭司ヨシュアであったが、彼らが主導する「ユダ・イスラエル共同体」再興事業は、必ずしも対立するグループの賛同を得られていなかったと考えられている。これら諸グループを包摂する大義を提示することは、彼らにとって重要な課題であったが、そこで大きな役割を担うことになったのが、祭司・預言者集団であり、エルサレム神殿の再建のみならず、「正典」編纂によって、必ずしもユダ州地域への帰還を伴わない「ユダ・イスラエル共同体」構想を提示することに成功し、後の「ユダヤ教・ユダヤ人社会」の基礎を据えることになったのである。

・日課箇所が提示する「主の僕」は、53章で「苦難の僕」として描かれるまで、繰り返し取り上げられる匿名の人物で、ユダヤ教においてもキリスト教においても、この人物を特定する共通理解は得られていない。歴

史的背景から推測するならば、初期の「共同体再興事業」に従事しながら諸グループの反対に遭い、不遇のまま生涯を閉じた人物あるいは集団を想定しているのだろう。また、「第二イザヤ」は、ペルシア帝国建設の立役者キュロス王を「油注がれた人」(45:1)すなわち「メシア」とみなしており、預言者の語る「主(ヤハウェ/アドナイ)」が召して務めに任ずる者のうちには、ペルシア王や王から遣わされる州太守ら役人も含意されていたと考えられる。

・1~3節は、「マタイ福音書」が典拠を示して引用している(マタイ 12:18 以下)。「第二イザヤ」の描く「主の僕」は、使徒たちの教会で主イエス・キリストを理解する第一の典拠にされたと考えられる。場合によっては、主イエス自身が「主の僕」を自身のモデルにしていた可能性も考えられる。

使徒書日課(エフェソ 2 章)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第5に置かれた書簡文書。「コロサイの信徒への手紙」と共に、使徒パウロがアジア州の諸教会に宛てた書簡の一つ。パウロは、バルナバ宣教団を離脱して独自にマケドニア伝道に赴いた後、コリントでの教会形成に携わることを経て主流の使徒たちと共同歩調を取るようになり、一時、アジア州の中心都市であるエフェソを拠点として活動したとされる(使徒 16~19章)。ところが、エフェソでの活動中に何らかの対立に巻き込まれ同地から距離を置き、エルサレムをはじめとする諸教会指導者と宣教方針についての合意を得るための活動を続けていたと考えられる(使徒 20章以下)。本書簡は、そのような背景の事情から、宛先教会の個別事情に対する助言というよりは、パウロの考える「包摂的な普遍主義に基づく教会」の基礎論が展開されるような内容になっている。

・日課箇所でパウロは、自身が考える救いに関する福音理解を提示している。ただし、ここでの提示の仕方は、「ローマの信徒への手紙」などの場合と異なり、必ずしも「聖書(旧約)」に典拠を求めていない。エフェソは、古代ギリシアの都市国家に起源を持つ都市のひとつで、アケメネス朝ペルシア時代の文化的影響を受けながらも外敵の破壊を免れて古いギリシア文化を継承していた。おそらくパウロは、そのような文化的背景にあるエフェソ、アジア州の教会に対して、ペルシア的世界観やギリシア的な思惟を援用した福音理解を提示しようとしている。「かの空中に勢力を持つ者」などの表現は、ペルシアのゾロアスター教的 worldview の影響であろう。また、「不従順な者たちのうちに働く霊」という表現は、パウロの典型的な「霊」の用法には必ずしも馴染まない。

・10節直訳「わたしたちは神の作品で、神が準備した良い働きのためにキリスト・イエスの内に創造された。わたしたちがその(働きの)内を歩むようにと。」「行い」(9節)は救いの要件ではなく、目的とされている。

福音書日課(ヨハネ 1 章より)

・日課箇所は、本福音書が共観福音書以上に重視する「洗礼者ヨハネ」の紹介記事の中で、ほぼ共観福音書と共通する「主イエスの洗礼」に関連する伝承逸話の箇所。多くの要素は、共観福音書が伝える「洗礼者ヨハネによる主イエスの洗礼」記事と共通するが、29節「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」という洗礼者ヨハネの発言を伝えることによって、洗礼者ヨハネの主イエス理解を提示するとともに、本福音書の主イエス理解の一つを提示することにもなっている。「見よ、神の小羊だ」という洗礼者ヨハネの発言は、後段 35節でも繰り返されている。本福音書は、主イエスを「贖罪の小羊」として理解する考えを提示している。

・主イエスを「贖罪の小羊」として明確に位置づけるのは「ヘブライ人への手紙」(9～10 章)であるが、共観福音書やパウロ書簡は、「過越の小羊」の理解にとどまっている。

来週の誕生日 (1 月 7 日～13 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-431 番「喜ばしい声ひびかせ」(= I 263)は、
- ・21-51 番「愛するイエスよ」(I-19 番「みこえきくとて」)は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、各国で広く歌われている讃美歌。「説教の前に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讃美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わせられた。
- ・21-75 番「今、装いせよ」(= II 95 番)。17 世紀ドイツの宗教詩人 J・フランクと当時随一の讃美歌作家 J・クリューガーのコンビによる。現代に至るまで聖餐讃美として広く用いられている。J.S.バッハは、この讃美歌を用いて作曲している。
- ・21-91 番「神の恵みゆたかに受け」は、20 世紀米国の音楽家 O.ウェステンドルフが作詞し、ウェールズ民謡曲と組み合わせで発表された。

21-431「喜ばしい声ひびかせ」**Blow ye the trumpet, blow**

1. Blow ye the trumpet, blow! / The gladly solemn sound / let all the nations know, / to earth's remotest bound: / The year of jubilee is come! / The year of jubilee is come! / Return, ye ransomed sinners, home.
2. Jesus, our great high priest, / hath full atonement made; / ye weary spirits, rest; / ye mournful souls, be glad: / The year of jubilee is come! / The year of jubilee is come! / Return, ye ransomed sinners, home.
3. Extol the Lamb of God, / the all atoning Lamb; / redemption in his blood / throughout the world proclaim: / The year of jubilee is come! / The year of jubilee is come! / Return, ye ransomed sinners, home.
4. Ye slaves of sin and hell, / your liberty receive, / and safe in Jesus dwell, / and blest in Jesus' live: / The year of jubilee is come! / The year of jubilee is come! / Return, ye ransomed sinners, home.
5. Ye who have sold for nought / your heritage above / shall have it back unbought, / the gift of Jesus' love: / The year of jubilee is

come! / The year of jubilee is come! / Return, ye ransomed sinners, home.

6. The gospel trumpet hear, / the news of heavenly grace; / and saved from earth, appear / before your Savior's face: / The year of jubilee is come! / The year of jubilee is come! / Return to your eternal home.

21-51「愛するイエスよ」**Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort**

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhüllet, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

21-75「今、装いせよ」**Schmücke dich, O liebe Seele**

1. Schmücke dich, o liebe Seele, / laß die dunkle Sündenhöhle, / komm ans helle Licht gegangen, / fange herrlich an zu prangen! / Denn der Herr voll Heil und Gnaden / will dich jetzt zu Gaste laden; / der den Himmel kann verwalten, / will jetzt Herberg in dir halten.
2. Ach wie hungert mein Gemüte, / Menschenfreund, nach deiner Güte; / ach wie pfleg ich oft mit Tränen / mich nach deiner Kost zu sehnen; / ach wie pfeget mich zu dürsten / nach dem Trank des Lebensfürsten, / daß in diesem Brot und Weine / Christus sich mit mir vereine.
3. Heilige Freude, tiefes Bangen / nimmt mein Herze jetzt gefangen. / Das Geheimnis dieser Speise / und die unerforschte Weise / machet, daß ich früh vermerke, / Herr, die Größe deiner Werke. / Ist auch wohl ein Mensch zu finden, / der dein Allmacht sollt ergründen?
4. Nein, Vernunft, die muß hier weichen, / kann dies Wunder nicht erreichen, / daß dies Brot nie wird verzehret, / ob es gleich viel Tausend nähret, / und daß mit dem Saft der Reben / uns wird Christi Blut gegeben. / Gottes Geist nur kann uns leiten, / dies Geheimnis recht zu deuten!
5. Jesu, meine Lebenssonne, / Jesu, meine Freud und Wonne, / Jesu, du mein ganz Beginnen, / Lebensquell und Licht der Sinnen: / hier fall ich zu deinen Füßen; / laß mich würdiglich genießen / diese deine Himmelsspeise / mir zum Heil und dir zum Preise.
6. Jesu, wahres Brot des Lebens, / hilf, daß ich doch nicht vergebens / oder mir vielleicht zum Schaden / sei zu deinem Tisch geladen. / Laß mich durch dies heilige Essen / deine Liebe recht ermassen, / daß ich auch, wie jetzt auf Erden, / mög dein Gast im Himmel werden.

21-91「神の恵みゆたかに受け」**Sent forth by God's blessing**

1. Sent forth by God's blessing, our true faith confessing, the people of God from this dwelling take leave. The supper is ended. Oh, now be extended the fruits of this service in all who believe. The seed of Christ's teaching, receptive souls reaching, shall blossom in action for God and for all. Your grace shall incite us, your love shall unite us to work for your kingdom and answer your call.
2. With praise and thanksgiving to God ever-living, the tasks of our ev'ryday life we will face--our faith ever sharing, in love ever caring, embracing God's children, the whole human race. With your feast you feed us, with your light now lead us; unite us as one in this life that we share. Then may all the living with praise and thanksgiving give honor to Christ and his name that we bear